

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720039

研究課題名(和文) ヨーロッパ、ネイション、文明 思想史的アプローチによる

研究課題名(英文) Ideas of Europe, nation and civilization. An approach from the history of ideas

研究代表者

片岡 大右 (Kataoka, Daisuke)

東京大学・人文社会系研究科・研究員

研究者番号：30600225

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：ヨーロッパは、一方では一枚岩のものではなく、異質な諸要素の絡み合う場として捉えられるべきであるにもかかわらず、他方では、それでもなお、何らかの統一性のもとに想像され続けている。そうした統一性を支えるヨーロッパ理念の来歴を、それが「キリスト教共同体」の理念に次第に取って代わる近世から、EUの制度的枠組のもとに統合プロセスの進む現在に至る、歴史的パースペクティブの中で辿りなおすこと。本研究は、きわめてアクチュアルであるとともに領域横断的なこの課題に、ネイションと文明という別の二つの理念との関係に注目しつつ、思想史的観点からの一定の貢献を試みた。

研究成果の概要(英文)：Despite all its multifaceted characteristics and heterogeneity, Europe is nonetheless imagined as an entity, not just a collection of separate nations. What is this consciousness of unity? To understand it, we must examine various aspects of the idea of Europe in a wide historical perspective, from the early modern period when it begins to replace that of Christendom until the present day characterized by an integration process, developed in the institutional frame of the European Union. In this project, we tried to contribute to this wide, complex and interdisciplinary issue, in an approach of the history of ideas, taking into account relationships between the idea of Europe and two other ideas: those of nation and civilization.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：ヨーロッパ ジョゼフ・ド・メーストル C・L・R・ジェイムズ エリック・ウィリアムズ シャトーブリアン 文明 欧州統合

## 1. 研究開始当初の背景

フランス・ロマン主義の先駆者として後世に絶大な影響力を持った作家シャトブリアン(1768-1848)の研究から出発した研究代表者は、博士論文に至る過程で、この作家への取り組みを中心に据えつつも、より広範な問題設定の中にこれまでの研究を統合すべく企てた。キリスト教的世界観の美学的な転用の分析に始まった研究は、その進捗に伴い、一方では、たんに美学的な効果の問題にとどまらないキリスト教的諸価値の世俗化というより一般的な過程の検討へと深められていき(なおこの問題に関する最重要文献、ポール・ベニシュの『作家の聖別』の翻訳が、2014年夏に刊行予定である)、他方では、キリスト教的ヨーロッパおよびその世俗化ヴァージョンとしての近代西洋の、それに対する異質性(地理上の外部においてのみならず、内部においても見出される)との関係における理解へと拡張されていったのである。こうして書かれた博士論文は、隠遁者、野生人、蛮人の三形象の系譜の分析を通してなされた、文明の理念の系譜学の試みであり、2012年に公刊することができた(『隠遁者、野生人、蛮人 反文明的形象の系譜と近代』)。ともすれば西洋人にとっての「我々と他者」の問題(西洋による非西洋の表象の問題へと一般化されがちな主題を、上記の三つの形象の役割に着目することで再歴史化しつつ、本論文は都市的な文明からの隔たりによって特徴付けられるこれらの形象が、基本的にはヨーロッパ内部に見出されていたこと、なるほど「他者」ではあろうが、それはしばしば「我々」の内なる他者でもあったことを明らかにした。文明の理念の来歴を反文明的諸形象の側からたどり直すことにより、文明的ヨーロッパとその外部という図式の自明性を解きほぐし、ヨーロッパがその内部に抱え込んでいる様々な異質性を分析の俎上に上せることに成功したと考えている。

## 2. 研究の目的

こうして、博士論文に至る研究に従事する過程で研究代表者は、ヨーロッパの統一性と外見の裏側に潜む内的な複数性を歴史的に跡付けようと努めてきた。しかし、そのような研究を進めるにつれて生まれてきたのは次の疑問である。異質な諸要素の絡み合いから成り立っているこのユーラシア大陸西端の地域が、しかもヨーロッパの名のもとに理解される地理上の範囲の「可変性」(ホブズボーム)にもかかわらず、何らかの統一性のもとに思い描かれていること、そしてこの想像上の統一性が、やはり「想像の共同体」(アンダーソン)には違いないヨーロッパ内部の諸国民国家のケースと比べても曖昧さに満ちて不安定なものであるとはいえ、それでもなお、今日EUの制度的枠組のもとに進められている統合プロセスへの関係諸国民

の合意形成を可能にする程度には現実的な重みを保持していること、こうした事情をどのように理解するべきなのか? ヨーロッパという自明性を取り去る作業の後に改めて、それでも現に十分に機能しているように思われるヨーロッパ理念の機能と来歴への関心が高まってきたのである。進行中の統合プロセスの現実的諸問題への関心(その一端は、申請時に従事しており、2012年に刊行されたドゥノール&シュワルツの欧州統合論の翻訳のうちに反映している)を思想的な問題意識と関連させながら、ヨーロッパというこの理念の来歴を、それが「キリスト教共同体」の理念に次第に取って代わる近世から現在に至る歴史的パースペクティブの中で具体的に辿りなおすことに思い至った次第である。

このようにして、ヨーロッパ理念の系譜の検討という本研究課題の中心的モチーフが生まれたのであるが、その際、この理念を別の二つの理念、すなわちネイションおよび文明の理念との関係で理解することが構想された。というのも、第一に、ヨーロッパ理念は歴史上、「ヨーロッパ人」である以前に「ドイツ人」や「フランス人」、ないしは「ロシア人」であるような誰かによって担われてきたからであり、そうした特定地域への帰属とヨーロッパという広域を貫く理念の体現とを巧みに関連付けるべく、様々な論理が案出されていた。第二に、広範な領土を覆うものだとはいえ結局のところ「アジア大陸の小さな岬」(ヴァレリー)にすぎないこのヨーロッパは、しかし「文明」(単数定冠詞を付された)の特権的な担い手として現れることにより、普遍的諸価値の体現者たることを主張していた。これら二つの理念との相互的な連関の中で検討することにより、特殊と普遍の間に成立するヨーロッパ理念の独自の諸特徴を歴史的な文脈の中で明らかにし、かつまたその様々な帰結と効果とを明らかにするのが本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

本研究は主として、16世紀から両大戦間期までの時期を分析の対象とする。

平成23年度は主として16・17世紀を対象とした研究を行い、『隠遁者、野生人、蛮人 反文明的形象の系譜と近代』での議論をも踏まえつつ、関連する一次・二次文献のさらなる渉猟に努める。平成24年度は18世紀から19世紀前半にかけての諸問題に取り組み、ヨーロッパの領域画定をめぐる18世紀思想家たちの態度、19世紀におけるヨーロッパ理念の、政治的立場の相違を跨いだ活用の諸事例といったテーマを、同時期におけるナショナリズムの台頭や文明の理念の展開との関連で分析する。平成25年度は19世紀後半から両大戦間期までの諸問題を、主に独仏の事情を中心に取り扱い、「文明」の普遍性(フランス)対「文化」の特殊性(ドイツ)

の対立としての図式的単純化を退けつつ、様々な両義性を明らかにしていく。そして、第二次大戦後から 21 世紀初頭の現在に至るまでの諸問題については、上記計画にとらわれずに常時検討を続け、そうして培われたアクチュアルな問題関心を、研究本体へと絶えずフィードバックしていく。

#### 4. 研究成果

本研究を通して、ヨーロッパの理念が 16 世紀以降現在に至るまでの歴史状況の中で果たしてきた役割を、ネイションおよび文明という二つの理念との関わりを念頭に置きつつ見極める作業が進められた。

博士論文を改稿して刊行された図書は、全編を通して本研究との関わりで読まれるべき業績である。学会発表では、反革命思想家ジョゼフ・ド・メーストルがヨーロッパ諸国民を、建国者である北方の蛮人たちの関係でいかに理解していたのかの検討がなされた。図書への寄稿論文においては、英領カリブの島トリニダード出身の黒人思想家・活動家 C・L・R・ジェームズが、典型的なイギリス支配層の教育を受け、ヨーロッパ文明の粋を吸収した彼ならではのやり方で、社会主義的な文明理念を古代ギリシアの都市国家を範例としつつ提示していることが示唆されている。ドゥノール&シュワルツ『欧州統合と新自由主義』(その他)およびその解説(その他)を準備する過程でなされた研究においては、いわゆる「新自由主義」の経済的イデオロギーの発生と展開に際してのヨーロッパ理念の重要性が明らかになった。ベニシュの『フランス・ロマン主義』連作をめぐる二つの学会での刊行プレ・イベント(学会発表、その他)では、ロマン主義運動の汎ヨーロッパ的性格が再確認されるとともに、各国ロマン主義の差異をめぐり、最新の研究動向を踏まえての討議がなされた。雑誌論文においては、フランスおよび欧州諸国の新しい極右的イデオロギーの担い手である「アイデンティティ派」の運動を論じたが、この運動を特徴づけるのは、各国のナショナル・アイデンティティの確立という旧来の右翼にとっての課題を、一方では国民国家内部の諸地方の独自性の再評価によって、他方では諸国民国家を包摂するヨーロッパ・アイデンティティの重視によって、補完することである。そして、本研究の締め括りの時期には学会発表を行う機会を得て、古代ギリシアから 21 世紀の現在に至るまでのヨーロッパ理念の変遷を概観しつつ、それとネイションおよび文明の理念との絡み合いが検討に付された(なお、ワークショップを踏まえた論集が刊行予定である)。これまでの研究を通して浮かび上がってきた諸課題を踏まえ、以後、ロマン主義、欧州統合、レイシズムの三つの主題を導きの糸として、19 世紀から現在に至るまでの様々な時代状況の中でのヨーロッパ理念の機能を分析

するという新たな展望を開くことができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計 2 件)

片岡大右、社会的包摂を通しての垂雇用の創出 ロベール・カステル『社会問題の変容』とその後、唯物論研究年誌、査読無、第 18 号、2013 年、173~181 頁

片岡大右、フランスと日本の右傾化とレイシズム アイデンティティ派と在特会、人間と教育、査読無、第 79 号、2013 年、54~61 頁

##### [学会発表](計 4 件)

片岡大右、ヨーロッパ理念の歴史と現在、CPAG 若手研究者ワークショップ「ヨーロッパ」とその他者、東京大学東洋文化研究所、2014 年 2 月 23 日

片岡大右、鏡とアイロニー スタンダールにおける生表象、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知」、一橋大学、2014 年 2 月 1 日

片岡大右、ポール・ベニシュの生涯と業績、日本フランス語フランス文学会秋季大会、神戸大学、2012 年 10 月 21 日

片岡大右、ジョゼフ・ド・メーストルにおける自然法・野生性・ヨーロッパ、日本フランス語フランス文学会春季大会、一橋大学、2011 年 5 月 28 日

##### [図書](計 3 件)

小沢弘明・三宅芳夫編、移動と革命 デイアスポラたちの世界史、論創社、2012 年、片岡大右、革命家と首相の見たアフリカとカリブ海域 C・L・R・ジェームズ『ブラック・ジャコバン』とエリック・ウィリアムズ『コロンブスからカストロまで』を中心に、163~180 頁

田村毅・塩川徹也・鈴木雅生・西本晃二編、フランス文化事典、丸善、2012 年、片岡大右、ジャンヌ・ダルクとナショナリズム、283 頁、共和暦、340~341 頁、《ラ・マルセイエーズ》、342~343 頁、三色旗と白旗・赤旗、344~345 頁

片岡大右、隠遁者、野生人、蛮人 反文明的形象の系譜と近代、知泉書館、2012 年、ix、434 頁

##### [産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

- 書評・解説その他  
片岡大右、メーストル思想をシュミット流の「政治神学」から解放する試み、ふらんす、第 88 巻第 12 号、2013 年、73 頁  
片岡大右、ヨーロッパ新自由主義の歴史と現在、フランソワ・ドゥノール、アントワーヌ・シュワルツ『欧州統合と新自由主義 社会的ヨーロッパの行方』小澤・片岡訳、論創社、2012 年、251～277 頁  
片岡大右、キリスト教と文明：スタンダールとシャトーブリアンの事例に即して、スタンダール研究会会報、第 21 号、2011 年、2～3 頁
- 翻訳  
フランソワ・ドゥノール、アントワーヌ・シュワルツ『欧州統合と新自由主義 社会的ヨーロッパの行方』、小澤裕香・片岡大右訳、論創社、2012 年、291 頁  
アンヌ＝マリー・クリスタン「ウージェーヌ・フロマンタン、作家にして画家」、片岡大右訳、マリアンヌ・シモン＝及川編『絵を書く』、水声社、2012 年、21～47 頁  
フロランス・デュモラ「夢を描写するアロイジウス・ベルトランと「心理学者」たち」、片岡大右訳、シモン＝及川編前掲書、183～202 頁  
Masaru IKEZAWA, « Constructions mémorielles et politiques autour des victimes de mort violente, de mort collective et de la guerre » (trad. Daisuke KATAOKA), Anne Bouchy et Masaru Ikezawa (éd), *La Mort collective et le politique. Constructions mémorielles et ritualisations*, Institut des sciences humaines et sociales, Université de Tōkyō, 2011, pp. 9-31.
- 司会・コメンテーターなど  
川上洋平著『ジョゼフ・ド・メーストルの思想世界』（創文社、2013 年）合評会、第 7 回フランス政治思想研究会、東京大学社会科学研究所、2013 年 12 月 12 日（コメンテーター：片岡大右）  
片岡大右著『隠遁者、野生人、蛮人 反文明的形象の系譜と近代』（知泉書館、2012 年）書評会、ロマン主義研究会、一橋大学、2012 年 10 月 28 日（話題提供：片岡大右）  
19 世紀フランスにおける「文学的なもの」

と社会 ベニシユー『作家の聖別』『預言者の時代』翻訳出版を機に、第 37 回社会思想史学会大会、一橋大学、2012 年 10 月 27 日（司会：片岡大右）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

片岡 大右 (KATAOKA, Daisuke)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員  
研究者番号：30600225

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：